



## 松浦武四郎の遊歴の心 池田光司 会員

## 初期

江戸末期に生まれた松浦武四郎の生家の前にはお伊勢参りで賑わう伊勢街道が横たわっていた。幼少時期にそのお伊勢参り行き交う通行人の方言を耳にし、異郷への興味を抱く。地元の津藩士であり漢学者であった平松楽斎に学問、「救荒植物」等を学び、武四郎の視野は大きく広がってゆく。とうとう16歳で家出をするほど異国への興味を強めて行く。

## 全国へ

17歳で全国へ。武四郎は江戸で「篆刻」を学び旅の糧としたことは「遊歴の心」の本気度を表していた。津藩と同じ徳川御三家の水戸藩に接近し後の貴重なネットワークを構築。水戸藩では神職加藤木清三、尊王攘夷論者会沢正志斎等に師事し、後に水戸藩家老、水戸学藤田東湖へと繋がる人脈を築く。本人の学びへの習得力がなければ成しえない出会いであり、後に有益な財産となってゆく。当時諸外国との交流が盛んな長崎では薬草学者より「蝦夷地がロシアに踏み込まれる」という噂を聞きつけ、直ちに蝦夷地への旅を決断する。幼児期の薬草学を習得したことが大きなうねりとなる。

## 蝦夷地へ

津に戻り両親のお墓参りを済ませると蝦夷地へ向かう。松前藩に宿をとり蝦夷地を探索する。然し同時に松前藩の圧政に苦しむアイヌの窮状も知ることとなる。武四郎はアイヌの人々に寄り添い、アイヌ語を習得、寝食を共にしながら旅を続ける。「魚肥」作りの為にアイヌを搾取、女性は役人の配下に連れ出す和人達に対し、「早くロシアがきてくれたほうが良い」と言うアイヌの呟きが武四郎の心を打つ。一旦江戸へ戻り、報告書をまとめる。それは千島列島や樺太等、先人達が踏破した蝦夷地の輪郭のみならず、アイヌの人々の地名を克明に書き込み、アイヌ民族の居住の証として書き上げた蝦夷地図であった。一方松前藩の悪政も克明に記録とした為、身の危険を感じる時期もあった。事実武四郎の妻は不審の死を遂げている。功績が認められた武四郎は1855年に幕府より「蝦夷御用御雇」に任ぜられ、再度蝦夷地へ向かう。

## 開国へ

1840年当時、イギリスは「アヘン戦争」により、日本も海防意識が一気に醸成されて行く。古来より海賊に悩む宇和島藩では海防意識が特に強く、武四郎はその

宇和島藩に招聘され、蝦夷地調査の支援を受ける。やがて、1853年の「ペリー来航」が浦賀湾に、ロシアのプチャーチンが長崎へ来航し開国を迫る。既に江戸湾の警備の任を担っていた宇和島藩に武四郎は絶対的な協力を惜しまなかった。一方、旧知の水戸藩では藩主徳川斉昭が幕府の海防参与に抜擢されていた。武四郎の詳細な蝦夷地図は、水戸藩を通して幕府に渡り、ロシア和親条約締結時(1855年)では樺太は共有地。択捉島迄は明確に蝦夷地領を主張することが出来蝦夷地を救った。

## 隠居

然し、条約締結後ロシアは樺太に軍や家族を定住させ又はロシア式洗礼を行い、一層実効支配を強めて行く。一方松前藩では、相変わらず商人と出稼ぎが主流であった。ついに1875年「樺太・千島交換条約」で千島列島全域を確保したものの、資源豊富でアイヌに先住民族が住む樺太を放棄。アイヌの人々は故郷を捨て江別市対雁に移住。命がけで作成した蝦夷地図が無為の存在となる。「定住なくして領土維持は不可能である」と、怒りと失望を滲ませ官吏も辞し隠居する。

## ロータリーと武四郎

異文化を正しく理解し、尊重する姿勢。私利私欲に囚われず、人道・正義を優先する姿勢。生涯に渡り現場を尊重し、好奇心と学び続ける姿勢は私のロータリー活動や職業奉仕の在り方に貴重な示唆を与えてくれた。

武四郎の挑戦力と夢を実現する為の努力と姿勢に少しでも近づける生涯でありたいと願う。



## ■本日のロータリーソング

## 我等の生業

2025-2026年度  
国際ロータリー会長のメッセージ

国際ロータリー会長:フランチェスコ・アレツツォ

よいことの  
ために  
手を取りあおう